Tsukuba Psychological Research
1987, **9**, 1-7

知覚論における動因作用説の周辺
Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(11)

筑波大学心理学系　金子　隆芳

Some issues related to motivationalism in the theories of perception

Takayoshi Kaneko (*Institute of Psychology, University of Tsukuba*)

Issues related to motivationalism or the directive state theory of perception are reviewed as discussed by Floyd H. Allport in his venerable volume titled *Theories of perception and the concept of structure* (1952). The issues discussed are dimensionalism, the problem of nativism vs empiricism, and non-veridical social perception. Confusion of means-use and end-use of dimensionality is criticized. The means-use in motivationalism is considered adequate. Motivationalism is destined to combat with nativism which traditional theories tenaciously adhere to. Aggravation of theoretical cleavages between stimulus-bound, autochthonous, veridical perception and motivational, social cognitive perception is noted. Need for a unity of objectives is pointed out.

Key words : theories of perception, directive states, motivational, nativism, empiricism, social.

欲求，価値，パーソナリティのような動的要因が個人の思考や行動のみならず知覚にも影響するという動因作用説については，すでにこのシリーズでは指向状態説(文献参照)のタイトルで論じた．動因作用説という新しい知覚論の登場にあたって，これが対立しなければならなかった伝統的概念に，刺激の図形性と知覚のディメンジョナリティがある．

図形性についてはゲシタルト説，場理論，Hebb理論がある．Hebb理論はゲシタルト説と違って要素論的であるが，その中心問題に図形知覚があった．ディメンジョナリズムについては精神物理学，感覚ー筋緊張場理論，順応水準説，確率的機能主義がいずれもこれをテーマとしている．

これらの諸説についてもすでにこのシリーズでとりあげたものが多いが，図形性にしろディメンジョナリティにしろ共通なのは知覚が刺激のveridicalな特性によってもっぱら決定されるという刺激決定性stimulus-boundnessが理論的前提としてあることである．この点で知覚が人間のより主体的な要因の影響をうけるという新知覚論と対立するわけである．このことはとくにディメンジョナリズムとの対立において本質的である．

ディメンジョナリズム

means-useとend-use

ディメンジョナリズムを論ずるにあたって，まずディメンジョナルな属性に関する二つの理論的使用法を区別する必要がある．一つはmeans-useで，大きさ，方向，明るさなどのディメンジョンにおける量的判断が，それ自体は量的ではない仮説の検証に使用される場合をいう．これはゲシタルト説や感覚ー筋緊張場理論にみられる．もう一つは量的体験そのもの，ないしはその測定が出発点であり中心課題であるというend-useである．精神物理学や順応水準説がこの類であり，刺激変数と感覚量との共変関係の法則確立が目的である．

end-userは知覚量を規定する条件や法則を客観的に操作的にとりあつかい，方程式をたてる．彼らはmeans-userがディメンジョナリティを仮説検証の手段としてしか考えず，測定も厳密でないことに不満である．end-userは感覚水準にとどまり，推論や判断のような高次の過程の介入を好まない．しかし量的形式だけで知覚理論が十分に表現されるものかどうか，これに完全な意味を与えるためには非量的

な何かが本質的に必要ではないか，が問題となろう．

means-user にとっては法則の一般性はあまり問題にならない．たとえば異なる実験間の量的整合性を考えず，自由な手続きをとることができる．何らかの要因のもとで何らかの量的な差があれば，仮説は検証されるのである．ところでこの区別によってみれば明らかに動因作用論者は end-user であることがわかる．彼らの仮説は動機や欲求あるいは価値が，知覚に影響するということであり，その影響を受けるものが「たまたま」量的側面であるわけである．

量の操作的定義における問題点

Helson とBrunswik はいずれもデメンジョナリストであるが，彼らの量的次元の操作的定義には若干の相違があり，それが(Bridgman の言葉を使えば) penumbra of uncertainty を生じている．

Brunswik の事物の恒常の実験手続きでは，被験者は量的変数について正確な知覚を得るように指示される．例えば一つの対象がどの位大きく見えるかについて，その態度は veridically oriented であり，object-bound である．反応は純粋に心理的な量ではなくて，「この物」，「あの物」の大きさについてである．要するにそれは何センチか，何グラムかを推定することである．

それに対して Helson の順応水準実験では刺激対象のより抽象的な，純粋に心理的な次元の反応が求められる．現在および過去の斯々の条件のもとで，たとえば10センチはどのくらい大きいか，100グラムはどのくらい重いか，ということである．Helson の場合，関連する知覚要素は単一変数であるが，Brunswik では手がかりは多種類かつ多様相である．両者ともそれらの要素の結合系を考えるが，結合の方式も違っている．

以上は実験室的な違いであるが，実際場面の知覚は果たしてそのように分離できるであろうか．還元窓を通して黒い一枚の紙の明るさを判断する場合を想定してみるとよい．このとき明るさの恒常はたぶん無いから，その紙面上の照度系列の上で紙の明かるさが変化し，灰色に見える順応水準を決めることができる．ここで突然風がきて還元衝立が飛んでしまったとしよう．光源，背景，その他の手がかりが回復し，Brunswik による恒常の条件はたちまちそろった．黒紙は果たして照明にかかわらず黒く見えるであろうか．

どちらになるかはそれこそ実験に訴えなくてはならない．その結果が恒常の法則通りであっても順応水準説であっても，どちらかが一般法則としては失格することになる．結果が両者の妥協点という可能性もあるが，その場合はこれらの三つのケースを総合的に予想する単一理論は何かとう一層困難な問題となる．

こういう場合，あらゆる条件のもとで知覚的明るさを予言するための一般的な方程式，あるいは少なくとも曲線族を作り上げるということもできなくはない．しかし一つの考え方として，一体，明るさの知覚において視覚系，さらには感覚－運動系になにが起こっているかについて，一般的モデルを立て，その上で明るさ法則を演繹，検証するという，より本質的な方法がありうる．これには相当な知覚生理学的知識を前提とするが，この方法において重要なことはその出発点において必ずしも量的ではない考察に基づいてモデル構成をするということである．量的次元は後から出てくる．しかし初めは量以外のこと，統合概念などを中心にモデル構成をするのである．

この理論的方略においてはディメンジョナリティの一意的量的法則をもとめることは直接の目的ではない．それはむしろ妨げになる．目的は知覚アグリゲートの構造とその相互作用的動的過程を明らかにすることにある．そこで初めて量的側面の共変関係の追及が新しい意味と可能性を持つのである．それはモデル・チェッキングの手段としてである．そのときわれわれはディメンジョナリティの end-user でなくて means-user である．

さて Helson-Brunswik の手続き上の違いにもどるが，このような Helson の実験におけるディメンジョナリティの体験と Brunswik の体験が同じといってよいかどうか，当然疑問である．一軒の家の見かけの大きさが順応水準に関して「大きい」と判定されたとして，それは恒常実験でも同じ体験であろうか．これまでは暗黙のうちに，大きさはいつも「大きさ」という同じ体験と考え，違うのはその報告の仕方であると考えてきたのではないか．内的体験については，われわれは内観報告を受け入れる以外にないのであるが，これはしかしいわゆる操作主義の排するところである．

操作主義によれば概念の定義は公共的に観察可能な操作にもとづき，主観的な言及は一切除かれねばならない．したがって内的体験そのものについての議論は回避せねばならないが，Helson-Brunwik における体験の発生と報告に関わる操作は確かに異なるのであるから，彼らにおける量の概念も操作的には異なっている．量の方程式化を第一次目的とする理論の探求において，量概念が互いに違っているという混乱が基本的にあるのである．

量的次元を主テーマとする他の実験についてはどうであろうか．精神物理学では知覚量をもっぱら近接刺激の関数として考察し，一対比較法や言語報告が操作にふくまれる．ゲシタルト学派は単一刺激要素を問題とせず，遠隔刺激布置条件における何らかの知覚量の報告が求められる．感覚－筋緊張場理論ではロッドの垂直操作を行ない，角度次元で測定される．恒常実験は比較刺激とのマッチング操作が行なわれる．

これらの操作は veridical な報告を要求したりしなかったり，言語報告であったり弁別反応であったり，それぞれ違っている．求められている経験が果たして同じ次元のものであるかどうか，それはわからない．現象的データからこれを直接検証する方法がない．仮にこれが同一の体験次元であるとすれば，異なる実験場面における異なる結果，しかもしばしば相容れない結果を予測する単一法則は何か，という難しいことになる．また実験の型が違えば体験の次元も異なるというのであれば，果たして共通項は何か．それがなければ方程式どうしの値の比較ができない．これらはいずれもディメンジョナリティの法則を第一の目的とし，その不可侵性を主張することのいかに困難であるかを示すものである．

経験説と生得説

知覚決定要因として個人の生活経験を強調すれば生得説と衝突する．動因作用説も経験的要因なしとしないから同様である．生得説と経験説は心理学論争の中でもっとも敬意を表するべきものの一つである．知覚におけるこの論争にいかに対処するかは，すべての現象的カテゴリーを真に知覚的なものと広義に解するか，または感覚の質，量的次元，あるいは恒常と図形性などに限定するかに依存する．基準枠，指向状態，意味などを容認すればどうしても経験が介入する．

過去経験，熟知度，学習などの経験的要因と知覚との関係についての事例は事欠かない．Duncker の記憶色の実験，Henle の鏡映文字の認知閾実験，機能主義的にみた空間知覚における経験と学習の役割(Hilgard)，習慣的学習反応としての知覚(Woodworth)，知覚体制に影響する経験の効果(Wertheimer)，細胞集成体形成仮説(Hebb)，順応水準説(Helson)等々である．

それにもかかわらず生得論者は何故，どのように自説を主張するのであろうか．一つの理由に知覚なるものが即座にして誤りのない過程だということがある．そこには学習の漸増的過程や意識的な試行錯誤と似たものは何もない．経験的な何らかの意味があると思われる場合でも，「知覚そのもの」に習得的なものはない．とくに図形性，恒常性，感覚次元に関して，生得説は強気である．直接経験としての対象の単なる大きさ，重さ，強さといったような属性が，過去経験の何らかの蓄積や，とくに一時的な欲求や感情によって変化するなどとは考えられない．われわれの知覚の多くははじめから即座であり，しかもかなり veridical であるから，経験や動因の効果といっても，それはただ知覚世界についての報告が誤ったり，停滞が生じたりすることであるにすぎない．感覚所与に対して検討したり解釈したりしているうちに，その結果が事実と違ってしまった，ということはありうる．しかし中枢感覚興奮のパターンそのものが経験的要因によって歪められたり，対象の感覚属性としての大きさ，重さ，色，その他が変化するものであろうか．

二人の人がレストランに入り，一人が喉が渇いてワイン，一人は空腹を覚えて料理に関心があれば，注意はまずそれぞれのメニュウに行くであろう．これは構えによる選択行動である．しかしワイン愛好家にとってメニュウのワイン・リストの文字が「より大きく」，「より鮮かに」見えるものだろうか．また空腹の人にはその逆に見えるのだろうか．もしも彼らが薄いカーテンをとおしてキチンの中をみたとき，なにかぼやけた物が一方にはワインの瓶に見え，他方にはハム・ジョイントにでも見えるとでもいうのであろうか．そのようなことをもし本気に考えるのなら，われわれはわれわれ自身の心的安定性の信頼に挑戦していることになる．

Pratt は過去経験説に反対である．むしろ意味の効果を排除したものとして知覚を定義する．彼は知覚の生得説のための基準を三つあげた．すなわち普遍性，発達の極めて初期におけるその存在，および刺激決定性である．とくに第三を強調する．学習過程における経験の効果は刺激－反応の結合の，感覚でなくして運動側面の問題である．

大きさの知覚はもっぱら視的手がかり，視角，視覚系におけるその関連過程に依存するもので，知識や過去経験は重要ではない．大きさの恒常においても，「対象がなんであるか」の知識に依存するのだという説は当たらない．実際，Holway & Boring によれば，大きさの恒常は単に視的手がかりの多いか少ないかの関数である．Hastorf は対象の知覚的距離は対象の大きさの観念に依存するといったが，Pratt によればこれはおそらく判断の基準枠の変化によるものである．大きさの恒常はもともと近い対象にしか通用しない．500メートルも離れた人物は，

たとえ人間だとわかってももはや非常に小さくしか見えないものである．

かくしてPrattによれば，感覚・知覚次元は刺激対象のみによって説明しなくてはならなら．例外は極めて希にしかないものであるから，それらしく見えたときには，(Prattの言い方によれば)「疑わないまでも，大いに批判的に」見なければならない．

Prattが大きさの恒常を対象の意味で説明するといったような安易な方法をとらないのは正しい．しかしその根拠がHolway & Boringだけではないにしても，経験的要因を一切排除するというのはやはり極論であろう．手がかりによって恒常度が高くなるとき，その手がかりに経験的意味があるということはないであろうか．ただしここで意味というのはwhat the object isという知識に含まれるgross and more obvious meaningではなくて，例えば何らかの距離手がかりと関連してその対象に到達するに必要な歩行距離といったような，細かな学習的な意味過程をいうのである．あるいは対象を手で取り扱うとかの何らかの可能な運動的体験との関係でとらえてもよい．

Prattの経験説批判を文字通りにとると，HelsonやWerner-Wapnerの結果もまた，これを疑わないまでも大いに批判的に見なければならない．確かに彼らの結果には一対一の刺激決定性はない．操作主義者であるPrattはもちろん知覚カテゴリーの操作的定義を唱えるが，それならばHelsonやWapnerの操作が他の精神物理学の操作のようにはなぜ受け入れられないのかPrattに問いたいものである．精神物理学的ディメンジョナリティをもっとも確定的かつ包括的であり，他の理論もこれに倣わねばならぬと考える人たち(Prattもふくめて)は，先に論じたディメンジョンの概念自身をとりまくpenumbra of uncertaintyをどのようにうけとめるであろうか．

以上の議論はもちろん問題を解決するものではない．議論の意図はまさに登場しようとしている動因作用説が当面する問題点を明らかにし，その理論的位置づけを行なうことにある．生得説には多くの主張があり，一般的な常識性がある．動因作用説(これを指向状態説という人もあるが)の道は容易ではない．経験説と生得説の妥協を図らなくてはならない．知覚研究を対象の性格や意味といった未開拓の分野に押しすすめなくてはならない．熟知度とか構えあるいは学習が知覚に対して選択的にはたらくといったような，ただそれだけの現状論を克服すること，そして個人の欲求，情動，価値などがパーセプトそのものを変容するように知覚行為に直接干渉するものであることを示す必要がある．

知覚理論の分裂

かくして登場した知覚の指向状態説は知覚理論においてまさに偶像破壊者であった．

それは精神物理学の伝統あるいはゲシタルト説，つまりは知覚理論の本命と鋭く対立した．それは環境に対する生物学的適応の一般的過程としての知覚を認めながらも，個体が個体として世界を知覚する仕方を一層の問題とした．換言すれば個体が彼自身の独自の理由においてfor reason of his ownその知覚の特定の側面の感度をコントロールする仕方を論ずるのである．

それはautochthonousな知覚を拒否するわけではないが，その法則が歪められることの方が重要である．知覚のveridicalityを認めながらも，彼らの一層の興味は動機づけやパーソナリティによってそれが歪められるケースにある．彼らは一種の機能主義であるが，他の理論と異なって著しく動因負荷的であり，情動中心的であり，自己防衛的である．その結果，知覚は生活適応にとって一般的にいえば適応的であるが，不適応のこともある．知覚はもはや物的世界の表象過程としてではなく，知覚者の性格づけの手段となった．

純粋知覚を問題とする伝統的知覚論は，精神物理学，順応水準説，恒常現象などにおいて，刺激決定性の法則あるいは刺激の図形的特性の体制過程によってこれを説明しようとする．それに対して指向状態説はより高次の過程，連合，判断，解釈，認知などをもちこんで刺激決定論に挑戦し，しかも伝統的精神物理学にしてみれば知覚の量的次元や閾といった，まさにそのホーム・グラウンドが戦場となったのである．

指向状態説は知覚的選択その他の各種メカニズムを導入した．行動を支配する個人の欲求あるいは動機づけは知覚行為をも支配し，これを「強めたり，早めたり，遅らせたり」，あるいは「共振したり，妥協したり」する．自らに対して自らを防衛するということさえある．

彼らの用語法はルースな比喩的な言い方であると批判されるが，いつもそうであるわけではない．擬人的解釈をさけ，つとめて行動理論的な基礎づけを試みている．しかも指向状態は個人により異なり，場面によって異なる　その故にveridicalな知覚法則から逸脱し，しかもそれが正当化されるのである．

臨床社会心理学における動的知覚

対象知覚　対　社会的認知

知覚理論におけるこの分裂を契機に，それまで心理学のどちらかと言えば特定の分野であった知覚研究のコースもまた変わってきた．

もともと臨床心理学者や社会心理学者は，その原点的形式において「指向状態」指向であった．知覚投影法については言うまでもない．しかし指向状態説は診断や臨床実験にあらためて open sesame を与えるものであった．知覚の誤りやそのメカニズムがパーソナリティ理解の鍵になる．

社会心理学者もまた社会的適応とかステレオタイプ，あるいは忠節と葛藤などの説明に，新しい知覚論は有効と考えた．人種偏見は態度，つまりは知覚のステレオタイプと考えられる．場理論や判断の基準枠も指向状態概念の一つの仮面と見ることができる．社会的な場や規範群としての集団が動機づけの力となり，枠組となって知覚に影響を与える．

社会心理学は方法論的にまだ若いせいもあって，行動論的方法もあれば現象学的方法もある．動機づけ，学習，知覚，認知，人格，いづれも集団行動の説明にとって基本的概念として強調される．そのなかでとくに知覚を人間関係や集団行動の理論的土台に据えようという一派がある．そのような社会知覚論に対して指向状態説は若干の影響を与えた．

社会心理学者の考える知覚はもちろんかなり広義のもので，彼らはこれを集団現象に対して発見的に結びつけようとする．したがって知覚研究における実験的伝統にはとらわれない．指向状態説と同様に知覚の決定因を刺激パターン以外のなんらかの力学的条件に求めるのであるが，そのコントロールの主体は内的動因というよりは，外的集団規範にある．外的集団規範は動機づけ的なチャンネルをとおして作用するのではあるが，作用の主体は社会的な力である．換言すればそれは文化的パターンであり，集団規範であり，その他の社会学的構成概念である．知覚過程とはそういうものの認知のことである．

ある個人の知覚する集団体制は一つの場である．彼の内的動機づけはその場の力に翻訳され，彼がその状況を知覚し，認知する仕方を拘束するが，それはその場と整合的な方向に，換言すれば場の平衡に向けて作用する．場の平衡は力動的であり，その水準には高低がある．いずれにせよ社会的場理論における現象的な場は知覚過程の作用の特異的媒体である．人は知覚するところにしたがって行動し，その結果が社会的場の構造にリアクト・バックし，知覚的認知的場の再体制化がおこなわれる．この意味における人間関係研究は知覚に始まり，多分，知覚に終わる．

社会的知覚論では知覚も認知も区別がない．その必要がないのであるが，それにしてもこれはたいへん幅が広い．社会生活を形成する複雑な状況のあらゆる理解が含まれている．他者を見ること，聞くこと，彼らの関係，価値，態度など，そのような意識のすべてである．それはほとんど社会的状況における個人の理解と同義である．伝統的知覚論が刺激のパターンや布置，精神物理的刺激次元，あるいは形や大きさの恒常などを扱っているのとは甚だ遠い．感覚筋緊張場理論や順応水準説におけるような，知覚に対する比較的単純な有機的効果とも大きな隔たりがある．このような実験室的課題は社会的現実における認知的意味や価値の渦の中では物の数ではなくなってしまった．

集団における行動を客観的 overt な行動論的現象として，したがって知覚についても社会的にしろ非社会的にしろ，これを各個体に共通な物理的対象の世界に対する生物的適応ないしは普遍的適応として見るならば，そのように対立した知覚論にはなりえない．しかし社会指向的動機，役割，規範が主役になると，知覚の刺激決定性は低下し，個人・集団の偏向，意識の non-veridicality の幅はたちまち大きなものとなる．

自動運動知覚における集団の影響についての例の Sherif の古典的実験では自動運動そのものがどのみち non-veridical であるが，社会規範の影響が強ければある集団の成員は他の集団とは異なる知覚を要請されるのであるから，さらに non-veridical にならざるを得ない．このような社会的知覚では，対象知覚の veridicality に求められるような denotable referent とは何かが問題となる．いまや知覚はすぐれて主観指向的意味をもつにいたっている．そのような知覚論にとっては物理的チェックはもはや無用になってしまったということができる．

知覚理論の認知的解釈的偏向をもちろんここで難じているわけではない．理論の背反がおこったことを指摘しているのである．それは刺激決定条件における the way the things appear to the individual という本来の課題からの逸脱である．しかも逸脱しっぱなしで，知覚体験の veridical testing の領域への bridge-back の責任も持たない．すべてこのことはこれまでの実験室的研究との，それは知覚と刺激との関係の極めて注意深い追及であったのだが，決別である．それはゲシタルト心理学にも言えることである．ゲシタルト説は単純な意味における刺激決定性は排除するけれども，心理物理的同形説という形でそれは残っている．

かくして社会心理学者は同じ「知覚」という用語を使用しながらも，それは対象意識，物理的世界の

関係，生物的適応の問題ではなく，社会認知的，現象学的 modus operandi へと変わった．それは集団活動における役割演技，自己概念，人間関係，文化的意義など，広範にわたる．この用語法をもって実験室的「知覚」概念の正当な延長という人もいるかもしれないが，両者を同じ連続体上にのせることは無理である．いまや実験室的知覚論者と社会心理学者と二つの知覚があるということになる．

もちろん単に定義上の問題として，刺激決定特性だけがパーセプトであり，意味や連合，認知的解釈を含まないとすることもできるが，それは問題の回避である．他方，もし「対象意識」と「連合的観念・連合的認知」との複合体を統合的知覚行動とみるなら，すべてその要素を統一するもの，知覚の本質的原理は何かについて，誰かが責任を取らなければならない．換言すれば認知，動機，学習などの客観的な，生理学的説明をそのような方向，つまり知覚の感覚的側面の生理学的説明と統合する方向に発展させなければならない．

現状では社会知覚論者も autochthonist も自らの知覚の定義に満足している．双方を総合する一般的解釈への動きはない．

指向状態説　対　刺激決定説

議論が社会的知覚に広がりすぎたが，問題を指向状態説に限定することとしよう．

指向状態実験にはいろいろの批判もあるが，われわれはこれをあまり不信の目をもって見ることはできない．知覚は古典的実験心理学が考えていたようには，確かに刺激決定的ではない．指向状態説は改善の余地はあるにしても，正しい軌道上に乗っている．要するにここで教えられることは，心理学を各分野に隔離すること，心理的過程を刺激決定性のもとに，あれかこれかにわけること，ある法則がある分野にだけしか適用されないとア・プリオリに決めてかかること，はいずれも実りあることではないということである．

ひるがえって，刺激決定性はそんなにも権威を失ったか，についても見直す必要がある．知覚は要するに生物学的適応過程であるから，知覚の有機的機能主義はその現象が起こる理由についての説明は十分ではないが，有機体の生活において予想される結果についてはよい指針となる．もしも知覚における生理学的アグリゲートがこの外的世界の忠実な再構成でないならば，われわれの生存は保証されない．われわれが外的環境を「その通りに」知覚するという事実に疑問はない．したがって正当な知覚理論は物的対象あるいは事象の知覚がかなりの程度に veridical であることをまさしく認めている，あるいは認めなくてはならない．

指向状態実験はそのような知覚に例外があり，それが情動に由来するものであることを示した．しかし本当の知覚理論はこの例外を指摘するだけでなく，何故それが例外であるのか示さなくてはならない．格別，動因的影響がない知覚はいくらでもある．刺激決定性の理論は知覚理論のあるべき姿として，われわれが対象を essentially as they are として知覚する事実を強調しなくてはならない．これは同時に何故 as they are not に知覚することもあるのかもふくめてである．

総合的知覚論に要請されること

知覚が社会的な場の力，文化的標準，集団規範などの影響を受け，そのために veridicality が損われるという社会的知覚論をそれはそれとして，そうではない場合，つまり知覚が安定的で，整合的で，veridical な多くの場合がなければ，人間にとって知的なコミュニケーションも秩序ある社会生活もありえないことのほうが一層大事である．

この本質論は物理的対象や実験的装置の知覚だけの話ではない．銀行，オフィス，軍隊，政府，あるいは家庭における対環境，対人間の交流を考えてみればよい．これらの場において，他者の発言，他者の行為に対して生理学的基礎にもとづく正確な知覚がなかったら，組織は成りたたない．それはおよそ安定的集団構造にとっての sine qua non である．もちろん十分なる理解に必要な文化的意味というものはある．しかし感覚チャンネルを通してくるパーセプトの基本的側面が，物理的体験に関して相当に veridical でなかったら，文化的意味それ自体が失墜するであろう．

文化が客観的な立証可能な存在であるならば，それは他者の行動やその生産物の正確な知覚を通して明らかにされるものである．したがって文化的規範や社会的な場の影響や変化を受けない知覚であっても，その生理学的構造をふくめて，実験室的知覚研究者のみならず，社会心理学者にとっての課題である．現実体験の物的世界を共通にもっているという意識が，社会的親密感や連帯感の要因となるのである．

社会知覚論に要請されることは，一方において特異的に認知負荷のたかい社会知覚の概念と，他方において人間にとって共通かつ veridical な性質の基本知覚をどのように統合するかということである．指向状態説はこの方向に貢献するものであるであろ

うか．社会的知覚に適切な位置づけをあたえることができるであろうか．指向状態説自身がいまだ試論的段階にあること，指向状態説も社会知覚の間口の広さからくるのと同じ問題を抱えている，つまりそのアグリゲートの多様な各要素を結合する原理に難儀をしていることなどを考えると，あまり期待はできない．なにより指向状態説は non-veridical な知覚に基づくものであるが，そういう理論は一般理論にはなりえない．知覚における個人的偏向やその診断的意味の誘惑は大きいけれども，そのような限定的問題への偏見によって基本問題をそらしてしまったり，またそれで解決できると考えてはならない．veridical を non-veridical で，typical を non-typical で説明しようとするのは，一般的用語ですべてを記述しようとする科学的努力を萎縮させるものである．

新しい知覚の発見に目を奪われて基本問題がおろそかにされてはいないか．why do things appear to us as they do？と問うとき，この質問は現象的体験がなぜ物理的世界の適切な表象であるのか，ということである．この世界の普遍的にして忠実なる再構成としての知覚の解決に(敢えて言えば)旧い知覚研究の長い努力の道程があったことを忘れてはならない．しかもその真の解決にまだほど遠いのである．

一方において実験室的アカデミズム，他方における実践的興味の対立は多くの科学理論の宿命であるが，人はなおそこに新たな統合を求めてやまない．それは veridical と non-veridical，広範な適応と個性的偏向，物理的基準と社会的規範のいずれをも包含することになろう．この課題は指向状態論者も autochthonist も，臨床的機能主義者も formalist も，社会心理学者も実験室的研究者も等しく責任を負っている．

要　約

指向状態説すなわち本論でいう動因作用説の登場にあたって当面する諸問題について論じられた．その一はディメンジョナリズム批判である．end use としてのディメンジョナリティにおける操作的定義の混乱が指摘され，指向状態説もその一つであるところのディメンジョナリティの means use の効用が示唆された．その二は経験説と生得説の問題である．動因作用説や指向状態説は知覚の経験的要素を避けられないという点で生得説と対立する．生得説には根強いものがあり，かつ真実もある．動因作用説がこれといかに対立し調和するかが課題とされた．その三は社会的知覚論としての動因作用説である．社会知覚論は動因作用説に道を開くものであるが，そこでは従来の刺激決定的な対象知覚と内的外的指向状態の支配する社会的認知との一層の対立がある．autochthonous な veridical な対象知覚論の科学としての正統性に対して，non-veridical な知覚にもっぱら根拠を求める動因作用的社会的知覚論の方法が問題とされた．最後にそのように分裂した知覚論の統合にあたっては，伝統的知覚論の本質を忘れるべきでないことが強調された．

引　用　文　献

Allport. F. H. 1955 *Theories of perception and the concept of structure*. New York: Wiley.

金子隆芳　1970　Allport の知覚諸学説批判とその構造学説　東京教育大学教育学部紀要，16，63－69.

金子隆芳　1972　知覚論における形態主義－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(続)　東京教育大学教育学部紀要，18，91－98.

金子隆芳　1974　知覚論における要素連合主義－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(続)　東京教育大学教育学部紀要，22，61－66.

金子隆芳　1976　知覚論における機能主義－Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(続)　東京教育大学教育学部紀要，22，101－108.

金子隆芳　1979　知覚における運動的要素－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(5)　筑波大学心理学研究，1，3－10.

金子隆芳　1980　知覚における意味の問題－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(6)　筑波大学心理学研究，2，1－11.

金子隆芳　1983　知覚の指向状態説－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(7)　筑波大学心理学研究，5，1－10.

金子隆芳　1984　知覚の仮説理論－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(8)　筑波大学心理学研究，6，1－8.

金子隆芳　1985　知覚のセット・ダイナミクス－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(9)　筑波大学心理学研究，7，1－6.

金子隆芳　1986　知覚と行動主義学習理論－Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(10)　筑波大学心理学研究，8，1－7.

－1986. 9.30　受稿－